

文学館だより

令和 7年 2月 1日
 若山 牧水記念文学館
 TEL 0982 - 68 - 9511
 文 貴 日 高 第106号

牧水母校作品展 はじまりました 見に来んね!

牧水母校3校の協力を得て、今年も牧水母校作品展を開催する運びとなりました。平成28年度坪谷小学校作品展からスタートしたこの企画、今年ご覧のように坪谷小学校から手づくり作品が届きました。早速先生方が足を運んでくださっています。お父さん、お母さん、じいちゃん、ばあちゃん、お近くの方、見に来ませんか。



牧水は明治29年、坪谷尋常小学校を卒業しました。

宮崎県立延岡高等学校 校内短歌大会入賞作品です。

初球からいくぞ一発フルスイングあの子が見てるの許して監督	1 年
九(く)年間共に過ごした親友が教室の中にもいない寂しさ	1 年
初めての電車に踏み込むその足に光るローファー希望をのせて	1 年
悔しさで涙する夜に十五件あなたはきっと超能力者	2 年
恋すれば盲目になると人は云うなってもいいわ君さえ見えれば	2 年
滑走路恋のひこうき曲がらないただ君めがけて飛ぶはずだから	2 年
汗ふきをくれよくれよと争奪戦夏の恒例ケアせよ男子(おとめ)	3 年
「来ぬ人を」札に触れない私の手青春(ぶかつ)が終わる畳の匂い	3 年
捨てていけ不安と後悔迷いなど宇宙行くとときと好きと言うとき	3 年
あの頃はグラグラしてた日常もうまくいくんだ自転車のように	3 年

牧水は明治37年、旧制延岡中学校を卒業しました。

早稲田大学 短歌会「わせたん」所属の作品です。

生サラダ!公道に放置されてる。トマトの断面、心拍ばくばく...	1 年
犬派ではないことあなたに反めかしてる ナックルボールの握りで投げる	1 年
夕暮れの島にあなたの影を見る波を砕いて泣いてしまっ	2 年

牧水は明治41年、早稲田大学を卒業しました。

第12回高森文夫を偲ぶ詩大会表彰式

1月19日(日)



入賞者のみなさん 一席 中山楓大さん(前列右)

郷土の詩人高森文夫を偲び、日向市内全小学校4～6年生を対象に実施している詩大会。今年は過去最多を誇る696点の作品が寄せられました。

表彰式は高森文夫の生誕の日、1月20日前後の休日としており、1月19日(日)に行いました。一人一人表彰を行い、一席の日知屋東小学校6年中山楓大(ふうた)さんが受賞者を代表して入賞作品を暗唱しました。

講評の中、空手の練習について書いた松野咲菜(えま)さん(日知屋東小6年)が演武を披露するサプライズがあり、詩に描かれている鍛錬の様子をかいま見る場面もありました。毎日の暮らしの中にある感動をメモして言葉にしていくこと、書き

っぱなしに終わらず推敲を重ねていくことなどの講評をいただきました。来年、また感動の数々を待っています。審査結果及び入賞作品は当館ホームページに掲載していますので、どうぞご覧ください。(写真後列左 選者 二見順雄氏 後列右 日向若山牧水顕彰会会長 那須文美)

歌会始 延岡市高校生は牧水・短歌甲子園出場者

ペンだこにうすく墨汁染み込ませ掠れた夢といふ字を見てる

森山文結

1月22日(水)、新年恒例宮中行事「歌会始の儀」が行われ、延岡市在住の高校生、森山文結(ふゆ)さんの歌が披露されました。森山さんは昨年の第14回牧水・短歌甲子園に出場しており、伊藤一彦選若山牧水記念文学館長賞を受賞していることを申し添えます。

【若山牧水記念文学館長賞】

この恋が終われば死ぬと言いつつ百物語みたいなあのこ

森山文結

第14回牧水・短歌甲子園結果より 令和6年8月17日～18日開催

みなさん、ご存じでしたか

みなさん、さだまさし作詞作曲の「あこがれ」という曲をご存じですか。グレーブ時代のアルバム『わすれもの』に収録されている曲です。

途中

あこがれてゆくのも ずっとこれからも
心の鐘を ひとり 打ち鳴らしながら

と歌われています。そうです。牧水の、

けふもまた心の鉦をうち鳴し
うち鳴しつつあくがれて行く

から歌詞が生まれているのです。

1月4日(土)仕事始めの日、来館されたお客さまに教えていただきました。そして後日、このCDほかを送られて来ました。みなさん、ご存じでしたか。さださん、文学館に来てくださらないかなあ…

楽曲解説

byさだまさし

12 あこがれ

ラストナンバーは収録曲中、最も昔に作ったこの曲を選びました。我乍ら口に出すのもおこがましいのですが、かつて若山牧水という人の詩にいたく感じ入って詩を作り、大チャイコフスキイのピアノ・コンチェルトの最も有名なメロディを必死で展開して曲をつけました。(以下省略)

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

けふもまた ころの鉦をうち鳴し うち鳴しつつあくがれて行く
きょうもまた ころのかねを うちならし うちならしつつ あくがれてゆく

「十首中国を巡りて」の詞書のある歌の冒頭歌。牧水が早稲田の四年生の夏休みの帰省の旅である。いつもの帰省は神戸から船で宮崎に向かったが、このときは中国地方を汽車と徒歩で楽しんだ。旅する心をうたったこの一首、眼目は「あくがれて行く」である。「あくがれ」の「あ」は「在」、「く」は「処」、「がれ」は「離れ」の意味で、心がいま在る処から彼方へむかっていく意。牧水は中学時代から「あくがれ」の語を愛し、使っている。古歌にも「あくがれ」の歌は少なくないが、牧水の場合は、意志的なそれゆえ近代的な「あくがれ」だ。(伊藤一彦『若山牧水の百首』より)